白き剣物語

あんどぅ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
白き剣物語

【Ｎコード】
Ｎ９４７９Ｚ

【作者名】
あんどぅ

【あらすじ】
ある日、アルシュエル国王に一枚の書類が届いた。それは隣国ゲーティア王国からの宣戦布告だった。こうして幕を上げた旧都市プーレを巡る戦争。そしてその戦争には、ある六人の学生が大きく関わる事となった。
これは、六人の少年少女達が戦火の中で成長していく物語ー…。

序章

男は読み終わった書類から顔を上げ、溜め息をついた。
「…ゴラスからは何と」
書類を持ってきた側近は、男が読み終わったのを見計らって尋ねた。
男…アルシュエル王国第百四十二代目フォーラム・S・アルシュエル国王は、高い天井に吊るされている美しいシャンデリアを悲しげに眺めながら言った。
「…『我々ゲーティア領土と化したプーレにこれ以上干渉するならば、貴国であっても手段は選ばぬ』と…」
「それは…我等に対する宣戦布告ですか」
「ああ」
国王は一つ返事をすると、椅子の背もたれに身体を預け、天を仰いぎ、右手で顔を覆った。
「まさか、私の代で戦に為ろうとはな……。ロイス」
「はっ」
ロイスと呼ばれた側近は片膝を絨毯の上に着き、俯いた格好で返事をした。
「軍部並びに魔法部に通達を。先ほど、隣国ゲーティアより宣戦布告が為された。従って、我等も宣戦布告を下した。さしあたっては、明日会議を開く。それまでには騎士、並びに魔法使いの召集をするように」
「畏まりました」
ロイスは一度頭を下げ、退室した。
一人残されたフォーラムは、天井に向かって呟いた。
「まさか私が宣戦布告を下すとは、夢にも思わなかった…」
フォーラムは体勢を整え、机に向かい、各部署にこれからの大まかな旨を伝える書類を書き始めた。

第一話

ここはアルシュエル国王直属の国立メーゲッシュ学院。
メーゲッシュ学院は国が唯一承認した国立の学院で、建国した当時からある名門校である。また、国立と言うだけあって学費は国が全額負担。さらに、入試時の成績優秀者には入学金全額免除制度まであり、家柄やその家庭の収入を問わず、実力さえあれば誰でも入れる学院だ。しかも、入学には年齢制限が無く、様々な年齢の受験者がいる。
ここまでの優待遇の学院は、毎年凄まじい数の受験者がおり、最大採用枠二百五十人に対して倍率は毎年三百は越えている。そのため、学院にいるのはエリート中のエリート。他の私立の学院とは違い、貴族ばかりが所属している訳ではなく、農民出身者や希に奴隷階級の者まで様々だ。
なぜそこまでして皆メーゲッシュ学院に入りたいかと言うと、この学院は王国直属の学院で、卒業と同時に国家公務員としての将来を約束され、さらに成績優秀者や各分野にずば抜けて成績の良い者は、王国の中枢とも言える中央管理局への配属が可能である。強いて言えば、奴隷階級から運が良ければ貴族階級にまで登り詰めることが可能と言うわけだ。また、この学院は一人二つの学科を専攻するという珍しい学院でもあるのだ。ちなみに、専攻は四つあり、『魔法科』『剣術科』『理数科』『文学科』がある。
そんな身分の関係ない入学を多くの者が勝ち取ろうと争うのが、メーゲッシュ学院なのだ。

そして今は夕方。
そんなエリートが集う学院内は、明日から冬休みと言うこともあり、皆早めに寮に戻り荷物を持って実家に帰る者がほとんどのため、

いつもはこの時間も部活動等で賑やかだが、いまは随分と閑散としている。
ほとんどの部活動は今日から始業式までは休みだが、一つだけ活動している部活動があった。
そこは学院の敷地内の隅にある小さなプレハブ。まるで積み木で作った様な可愛らしい色あせた黄色い壁の建物で、ほとんどの生徒がほとんどこない様な奥まった場所にひっそりと建っている。
その中から、微かに聞こえる複数の話し声。中には制服を着た四人の男子生徒と二人の女子生徒が、お世辞にも綺麗とは言えない、本と紙で埋め尽くされた部屋の中に居た。
すると、床に無造作に置かれている本や紙を選別する様に一つ一つ手に取って確認しながら集めている、長いウェーブのかかった金髪をした少女が、積み重なった本に埋もれている、肩にかかる程度の黒髪の少年に向かって言った。
「部長！私、今日中にはここを出るつもりなんで、なるべく早くお願いします」
「…なんか家出しますって言っているみたいだな。お前」
それに答えたのは金髪の少女ではなく、一番幼く見える少女だった。
「えっ！レイチェル家出するの？」
「バカ。違うわよ。…ほら、あんたのせいでテスが勘違いするでしょう」
もう、と金髪の少女が呆れたように言う。しかし、どこか楽しそうだ。
その様子を他の三人は笑いながら眺める。

冬休み前でも活動（？）しているこの部活名は『読書部』。
文字通り、活動は読書であり、読み終わった本の感想や意見交換を交わしたり、自分で小説を書いている者もいる。
この読書部は昨年創られたばかりの部活で、現在は部員六人。ち

なみに、この学院では三人以上（部長・副部長・会計）の部員が居れば顧問を置かなくても自由に部活を造れるという制度があり、現在部活動数は運動部と文化部合わせて六十五もの部活が存在する。そのため、ほとんど知られていない部活動も結構あり、読書部もその一つだ。

そんな読書部を設立したのが、部長の『ザーマイン・ヴォカル』である。彼は現在二年生で、魔法科と理数科を専攻している。年齢は十五歳で、部内では最年長だ。出身は二級貴族（貴族階級は一級から三級までである）で、そこそこの出だ。成績は中の上といったところ。基本は無口だが、部内では意外と喋る。

副部長は長いウェーブのかかった金髪の少女、『レイチェル・エーラン』。学年は二年生で剣術科と文学科を専攻。ザーマインと同じく十五歳で、彼とは幼なじみだ。出身は二級貴族。親が軍部の騎士団団長だけあって、剣術科で学院内選抜大会でで一位。王国の大会では男子に混ざって三位という優秀な成績を持ち、現在二年生の中では一番の成績優秀者だ。また、文学科でも優れた成績を残している。

そんな幼なじみの最年長二人を筆頭に、あと四人が部活動メンバーだ。

部屋の中央付近で寝転がりながら剣術についての本を読んでいるのは『サイネリア・ウィルシュ』。年齢は十三歳だが、学年はザーマインとレイチェルと同じ二年生だ。専攻は魔法科と剣術科。出身は農家。外見は藍色の髪を耳下位まで伸ばしている。部内では会計係りだが、実際に働いたことはない。

その隣でサイネリアが読んでいる本を横から見ているのが『メイティス・ジェーイット』。年齢は十三歳で、学年は二年生。専攻は魔法科と剣術科。出身は一級貴族。貴族と言っても、メイティスは小さい時からやんちゃで、常に泥を纏って塵一つない家に帰ってきていた。そんなメイティスとサイネリアも幼なじみで、農家の息子というサイネリアをメイティスを始めジェーイット家は気にせず、

遊んできた仲だ。この学院にも、一緒に入学しようと約束しており、メイティスと共に勉強したものである。

そしてそのメイティスの妹の『テートメルス・ジェーイット』は、兄と同じ様に短く切り揃えた茶髪をした、まだ幼さが残る少女だ。学年は一年生で、年齢は十二。専攻は魔法科と文学科。成績は優秀。彼女は兄メイティスと幼なじみのサイネリアに何時も付いて回り、一人を嫌う。理由は左右色の違う眼だ。右は母方の青、左は父方の赤という障害を持ってしまっており、この容姿は地域によっては悪魔と言われたりしまったり、イジメの対象になったりしてしまうのだ。そんなテートメルスを何時も守ってきたのがメイティスとサイネリアだったのだ。そのため、授業以外はその二人と共にいる。愛称はテス。

そして、部屋の隅で一人黙々と愛読書の魔法書を読むのは『オーウェン・サーストン』。十二歳の一年生で、専攻は魔法と理数科。容姿は銀髪に切れ目の美青年。出身は両親が銀行員の一般家庭。口は悪いが、以外と優しい性格だ。テートメルスと同じクラスで、仲が良い。

この六人のメンバーが読書部員である。少人数ということもあり、皆仲が良く先輩後輩の境が無いくらいだ。

ちなみに、何故無口なザーマインが読書部を設立したかというと、彼が偶然このプレハブを見つけ、勝手に使用。そのうち幼なじみのレイチェルも便乗。そして学院内を散策していたサイネリアとメイティスが迷い混んできたのが切っ掛けで、流石に無断使用はいけないだろうということで読書部を設立したのが始まりだ。そして翌年、メイティスの妹テートメルスが入部し、同じ様に偶然迷い混んできたオーウェンも楽しそうだからと入部。そして現在に至るのだ。

そんな読書部は今、冬休み前最後の集まりをしている最中である。

普通は明日から冬休みに入るので、今日は活動をしない部活動がほとんどだが、部長がどうしても集まると言うので仕方なく集まっ

ている状況だ。
　早く帰りたいとの要望が上がったので部長ザーマインは話を始めた。
「さて、皆集まったな…？」
「とっくに」
　レイチェルが嫌味ったらしく相槌を入れるが、ザーマインは華麗にスルーして続けた。
「話だが、皆知っている通り、近々本国アルシュエルとゲーティア両国は宣戦布告をした。」
「…そんなん誰だって知っているさ。で？それと俺達と何が関係あるわけ？そうじゃないと今この時期に集めたりしないでしょ」
　魔法書から目線をザーマインに移したオーウェンが言うと、その他の者も同意した様に頷く。
「まぁ、お前らには直接関係はないが、俺とレイチェルには関係があってな」
「…そうか。ザーマインとレイチェルは十五歳。軍部からの召集がかかるはずです…」
　最初に気が付いたのはサイネリアだった。
「そうだ。俺とレイチェルは今回の戦争に多分駆り出されるな。学生だろうが何だろうが十五歳以上の者は召集状が届くはずだ。」
「…私は昨日、先生から渡されたわ。」
「そうだろうな。お前は女子だが、剣術ではトップクラスだ。第一戦から使われる可能性がある。」
　レイチェルは溜め息を着きながら集めた本と紙束をバックに詰めた。
「そう言うわけで、多分冬休み開けには俺達は居ないと思う。まぁ、もしかしたら学院自体が休校もあり得るが。そこでだ……」
　なにやらごそごそとバックをあさり、一つの小さな巾着を取りだし、中身を手のひらに出した。そこには、六つのイヤーカフが。全てのイヤーカフには色が違う小さな石が埋め込まれている。ザーマ

インは一人一人にイヤーカフを手渡し、耳に着けるよう言い、自分の耳にも着け、全員着け終わったのを確認してから短い呪文を唱えた。
「レイス・ラン・アリテ」
すると、それぞれに埋め込まれた石がうっすらと光を放つ。
「…聞こえるか？」
「わぁ！すごーい！聞こえる聞こえる」
テートメルスは耳もとで聞こえるザーマインの声にはしゃいだ。
「これは小型通信機だ。発信した者が術者で、魔力を使うのも全て術者だ。しかし、これには備蓄型の魔法石を埋め込んであるから、各自余裕があったら魔力を流し込んでおけ。そうすれば例え戦闘中でも魔力の低下を気にせずに使える。…だが、これを使うときは本当に緊急の時だけにしろよ」
「…何故、こんなものを？」
メイティスははしゃいぐ妹を宥めながら問いた。
ザーマインは通信を切る呪文を唱え、通信を切った。
「戦争だ。いつ俺達がバラバラになるかわからないだろう？連絡手段はあったほうが良い」
「そうね。私とザーマインは戦闘に参加するし、多分親も何かしら関わるから、何かあったら一人になってしまうしね」
「確かに。特にテスとオーウェンはまだ十二歳だ。特にテスが一人になるのはなるべく避けたいし…」
「俺を子供扱いするな。たかが一年二年しか違わない」
オーウェンはメイティスを睨み付ける。
メイティスはごめんごめんとたしなめる。
すると突然、レイチェルはパンッと手を叩き、注目を集めた。
「…と、言うわけで、部長からのお話は以上。…でいいのよね？」
言った後に本人に確認する。ザーマインは静かに頷いた。
「では、皆さん。これでお開きということで！」
「宴会か…。まぁ、話すことはこれで終りだ。皆、冬休みだからと

言って油断しないように」
「…それはお前らだろうが」
オーウェンはそう呟いたのを最後に部屋を出ていった。
「優しいんだかわかんない子ね」
レイチェルが困った母親の様に笑みを浮かべながら見送る。
「…では、僕たちも帰りますね。」
サイネリアは読んでいた本を閉じ、目でメイティスとテートメルスに行くよ、と告げる。
「じゃあ、二人とも…どうかご無事で。怪我とか、しないで下さい」
「テスも、応援してるね！けど…あんまり無茶はしないで」
「…ほら、テス。泣かないの。…じゃ、二人とも気を付けて」
三人は何度か心配そうに振り返りながら退室した。
「…心配かけちゃったわね」
「仕方がない。言わなかったら彼奴等の尋問にはまるぞ」
「ふふ。そうね」
ザーマインとレイチェルは後輩達（年齢的）を見送り終わると、自分達も帰る支度を始めた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9479z/

白き剣物語

2011年12月29日17時40分発行